

自分自身と
自分の大切な人を
守るための
ソリューションを

*Focus
on
People*

Maria Tsuruoka



鶴岡

トイレで簡単に健康チェックができる独自のヘルスマニタリングサービスを開発したサイマックスの鶴岡マリア氏。ベンチャー企業を自ら立ち上げた経緯、「健康」というテーマに着目した理由、そして、これからのビジョン——。20代の若き起業家が、ビジネスに懸ける熱い思いを語った。

医療技術の目覚ましい発展によって、現代の病の多くは根治が可能になった。がんですら、もはや不治の病ではない。ただし、病の兆候を早い段階で発見することができるならば、だ。問題は、病気の早期発見が決して簡単ではないということである。

「人は明確な症状が表れないと病気に気づかないものです。年に1度の健康診断の結果も、病気というはっきりした判定がなければ、それほど気に留めない人も多いのではないのでしょうか。そ

うして、病気の発見が遅れることで、いつの間にか取り返しのつかない段階まで病状が進んでしまう。そんなケースが少なくありません。それはとても残念なことだと私は思います。だって、早い段階で病気に気づいていれば、治る可能性が十分にあるわけですから」

2014年にベンチャー企業「サイマックス」を設立し、「トイレ後付型ヘルスマニタリングサービス」の開発に成功した鶴岡マリア氏はそう話す。

自分自身や自分の大切な人を、これまでになく方法で守ることができる。



つるおか・まりあ

1989年生まれ。慶応義塾大学在学中にサムライインキュベートにインターンとして参画。卒業後、同社に正式に入社し、新規事業の立ち上げを手がける。退職後、2014年6月にサイマックスを設立。米誌「フォーブス」が選出する「アジアにおける30歳以下の最重要人物30人」に選ばれた日本人16人のうちの一人。

マリア

それがこのサービスの核にあるコンセプトであると鶴岡氏は言う。

「病気の兆候を日常生活で発見できるようにになれば、自分だけでなく、家族や友人の健康を守り、命を守ることができます。そればかりではありません。未病の段階で健康に留意する人が増えることは、日々増加し続けている日本の医療費を適正化することにもつながります」

では、どうすれば日常生活で病の兆候を見つけていることが可能になるのか。鶴岡氏が目をつけたのは、「尿」だった。人は必ず1日数度トイレに行く。そこでデータを取ることができれば、体重計に乗ったり、血圧測定をしたり、血液を採取したりといった特別な行動をせずに、日常生活のごく自然な動線の

中で継続的に健康状態を把握することができる。日々取得されるそのデータから異変が見つかったら、すぐに医師の診察を仰げばいい――。

このアイデアを実現するには、トイレに取り付けて尿からデータを取得するセンサーがいる。一人暮らしの自宅を除けばトイレは一人で使うものではないため、ユーザーを識別する仕組みも必要になる。またデータを送信し、蓄積するシステムも考えなければならない。

それらの課題を一つひとつクリアして独自のヘルスマニタリングサービスをほぼ完成させたのは、会社設立から2年ほどたってからだった。スマートフォンや社員証でユーザー識別をし、データをスマートフォンに自動送信して、アプリで管理するというのがそのサービスの仕組みだ。鶴岡氏自身は「IoT(モノのインターネット)」という言葉を意識していたわけではないが、それは結果的に「健康IoT」と呼ぶべき画期的なソリューションとなった。

VCでの経験を経て 自ら起業家に

高校時代に国際政治に興味を持ち、大学では法学部に進学した。転機となったのは、インキュベーションを手がける会社でアルバイトをしたことだった。米国のセコイア・キャピタルなどのトップVC(ベンチャーキャピタル)の投資先を調べて、どのようなビジネスがどう成長しているかをリサーチすることが彼女に与えられた仕事だった。

「仕事をして気づいたのは、シードス

テージ、アーリーステージのベンチャー企業を支援する人たちが米国にはたくさんいるということでした」

ベンチャー企業が本格的に始動する前の準備期間をシードステージと呼び、設立直後の時期をアーリーステージと呼ぶ。その段階のベンチャー企業を支援するVCが、当時の日本にはほとんどなかった。その事実には大きな危機感を覚えた。「このままでは、日本は米国にどんどん引き離されてしまうと思いました」と鶴岡氏は振り返る。

投資先のビジネス分野を深く理解し、シード、アーリーステージのベンチャー企業の支援をしている人はいないだろうか。そう考えていた鶴岡氏にもたらされたのが、まさしく初期段階にあるスタートアップを支援しているサムライインキュベートに関する情報だった。早速、代表の榊原健太郎氏に連絡を取り、インターンとして同社に関わるようになったのが大学4年の時だ。卒業後も、正社員として仕事を続けた。

「インターン時代から、本格的な事業立ち上げの仕事を任せられました。コワーキングスペース事業など、立ち上げに成功したビジネスもありましたし、実現には至らなかったアイデアもありました。VCやベンチャー企業の世界にじかに触れられたあの会社の4年間は、自分のキャリアにとって重要な時間だったと今振り返るとそう思います」

退社後、フリーランスとして活動した一時期を経て、自ら起業家となる道を選び、サイマックスを設立した。事業をゼロから生み出し、軌道に乗せること

健康不安を
抱えている人たちの
力になりたい

Focus on People Maria Tsuruoka



がいかにも大変かは、それまでの経験でよく分かっていた。

「いろいろなハードルを乗り越えてビジネスを成功させるには、自分が本当にやりたい事業を手がけなければならない。その事業が社会にとってプラスになると確信が持てるものでなければならない。そう考えました」

自分が本当にやりたいもの。社会のためになるという確信が持てるもの——。それが、自宅やオフィスで誰でも使えて、病気の早期発見につながり、人々の健康不安を払拭できるヘルスマニタリングサービスだった。

このソリューションは必ず誰かの役に立つ

このサービスのアイデアは、彼女自身の原体験から生まれたものだ。小学生の頃に母が病気で倒れたこと、親族が突然亡くなったことがその原体験である。もっと早く病気の兆候が分かっていたら、母は病気にならなかったかもしれないし、親族も命を落とさずに済んだかもしれない。両親は自営業だった。父と母が同時に病に倒れるようなことがあったら、生活は成り立たなかった。そう彼女は振り返る。

もし自分や自分の家族が今病気になったらどうすればいいだろう。そんな不安を抱えながら生活している人はたくさんいるに違いない。そんな人たちの力になりたい——。それが、このサービスの根底にある鶴岡氏の思いだ。しかし、健康であり続けること、病にならないことが最大の価値だと考えてい

るわけではないと、鶴岡氏は言う。

「健康になることが人生の目的なのではなく、やりたいことがあってそれを継続するためには健康というアセットが必要である。それが私の考えです。だから、やりたいことを犠牲にして健康になるための活動をするというのは、本末転倒だと思っています。日頃の生活の中で自然に健康管理をし、やりたいことをやりながら健康であり続けることこそが大切なんです」

ヘルスマニタリングサービス事業は、順調にいけば2018年の前半に本格的にスタートすることになる。当面の目標はその事業を軌道に乗せることになるが、サイマックスという会社を「健康専門」の企業にしようとは考えていない。世の中に課題があって、それを解決することが必要だと感じられれば、それを事業化することにチャレンジしていきたいと話す。

「私と私の周りの人たち、さらにその周りの人たちにとって、その事業が“善”であること。そして、私たちの先の世代にとっても“善”であること。より長い時間軸を持っていること。それが私にとってのビジネスの基準です」

資金繰りや技術面などでの悩みは尽きないが、20人のメンバーや投資家たちが彼女を力強く支えてくれている。

「このソリューションは必ず誰かの役に立つ。そう本気で信じている人たちと仕事ができるのは最高の幸せです」

そう彼女は目を輝かせる。起業家としての鶴岡氏の勝負が本格的に始まるのはこれからだ。

